

「からだ」 なつ はづき

次々とひとりのかたち綾取りは

バイオリンソロは佳境に冬木立

はつなつや肺は小さな森であり

日向ぼこ世界を愛せない鳩と

五月来る鉛筆すべて尖らせて

我儘はひとことで足る冬かもめ

夏あざみ父を許すという課題

沈黙の明るく置かれ晚白柚

森はふとひかがみ濡らし楸邨忌

端っこの捲れる笑顔シクラメン

右手から獣の匂い夏の闇

雨水とは光を待っている睫毛

地に刺さる喪服の群れよ油照り

ミモザ揺れ結末思い出せぬ恋

日傘閉じここに暮らしがあつた海

クッキーの微かな湿り鳥雲に

ふと触れる肘ひんやりと原爆忌

リストカットにて朧夜のあらわれる

身体から風が離れて秋の蝶

花疲れ鳴りっぱなしのファの鍵盤

夕花野ことば何処へも飛び立てず

初経祖母が最後に笑った日

宝石箱に小さき鏡野分来る

昨日から革命中のなめくじり

母の背が饒舌になり翳雲

薔薇百本棄てて抱かれない身体

チンアナゴみな西を向く神無月

蟻地獄母を見上げている少年

まどろみの隙間ふくろう息継ぎす

まなうらに白夜の記憶頬打たれ